



ロボットくんの原稿

岡田 安弘

メカに弱い。そもそもスマートフォン（スマホ）の機能を表すSNSなどの横文字の意味が分からない。携帯電話を使う人に出会うと嬉しくなる。

ガラパゴス諸島が「ガラ携」の名の起こりと知った。市場から孤立した商品と言うことらしい。孤立と言うなら固定電話の方だろう！！思わず気炎をあげる

自宅の電話にかかってくるのは、ほとんどセールス。連れ合いは「ベルがうるさい」と、電話機を小生の部屋に押し付け、スマホ暮らしに切り替える。バカ正直に受話器を上げているうち腹が立ってきた。ガラ携を買ったきっかけだ。固定電話は留守電にしたまま。

ガラ携の取扱店は再三、スマホへの買い替えを要求してきた。とうとう「メンテナンスは近く終わりです」と言う。抵抗もここまで。娘がガラ携の新機種を見つけ、勧めてくれた。未だ操作に慣れない。

『近い将来、人工知能（AI）のロボット記者がスポーツ面の記事を書く』。3年ほど前の新聞記事だ。ずっと気になっていた。ロボットくんに任せてよいものか心配だ。スポーツ部の記者をしていた後輩に「どういうこっちゃ」と解説を頼む。

昔、スポーツ記者の筆の速さには勝てないと思った。野球のナイターは朝刊の原稿締め切り時間との勝負だ。スコアブックをつけながら、試合経過と結果の総評（戦評）をスポーツ部のデスクに宛て電話で吹き込んでいた。

全ての競技の戦評を載せるにはページが足りない。なるだけたくさん掲載するため戦評は短文が良しとされた。戦評はスポーツ記者の筆力を量る目安でもあった。

後輩はメカ弱者にも分かりやすく解説してく

れた。デジタル時代で新聞の読者数は下降線をたどっている。経営側は人件費を抑制するため、記者減らしを考える。これがロボットくん誕生の経過らしい。

朝日新聞社は、これまで掲載された高校野球の戦評8万本をインニングなどと組み合わせ、コンピューターに記憶させた。手書きしていたスコアブックは、すでにパソコンに打ち込む電子スコアブックになっている。試合終了と同時に電子スコアブックをAIに入力。それをコンピューターが読み込み、1秒で戦評が出来上がる。キーボードで出稿を促せば済み。

テスト段階の失敗も話してくれた。ロボットくんが練習用の原稿を書いた。「2ランスクイズ」という表現を使ったが、出来上がった原稿「2ランスクイズ」の文字はなかった。高校野球で使われたことがない戦法だったため、AIは記憶していなかった。

2019年8月、第101回全国高校野球選手権決勝、履正社5-3星稜戦。ロボットくんの戦評がインターネット版で公開された。

『履正社が決勝戦にふさわしい接戦を逆転でものにし優勝した。1点を追う3回、井上の本塁打で逆転。同点に追いつかれた8回、一死三塁から野口の適時打が勝敗を決めた。星稜は再びリードされた9回に好機をつくるが、あと1本が出なかった』。記者が書いた紙面と遜色ない出来栄えだ。

日経新聞は上場企業の決算報告でAIを活用しているそうだ。NHKはプロ野球の300万球にのぼる打席のデータをAIに記憶させ、投手の配球を予測する機能を開発した。BS TVの番組で試用している。



ロボットくんの活躍で、記者の筆力を鍛える場が失われるのではなかろうか心配だ。後輩は「試合の熱気が伝わらない面もあります」と言う。ロボットは感情表現ができない。えらい時代になったなあ、と応じるしかなかった。